

	2013年 3月11日 第589号	JR東海労新幹線関西地方本部 http://www.geocities.jp/jrcu_s_kansai/ 発行責任者 小林 國博 編集責任者 高田裕雄
--	-------------------------	---

あの3. 11から2年！原発再稼働を巡る動き！

未曾有の被害を出した3. 11から丸2年が経ちました。福島原発事故は今も収束していません。東京電力によれば、福島第一原発の廃炉作業が完了するまでには、最大で40年かかる見込みだそうです。世界中に猛悪の放射能をまき散らし、美しい日本の国土に人の住めない地域をつくりだしたこの事故は、私たちに何が大切であるかを教えてくれたのではないのでしょうか？ ところがここに来て、原発の再稼働に向けての顕著な動きが目立っています。

安倍首相は2月28日の施政方針演説で、原子力規制委員会で安全が確認された原発は再稼働する方針を国会で明言しました。

最近になってJR東海の葛西会長は「エネルギー選択の視点」の中で、安倍政権の原発再稼働を評価し、「40万年前に断層が動いた可能性が、どれだけの意味があるのか。人類の歴史は5万年だ。現実を直視し、人知を尽くして安全に使う道を考えるのが世界の趨勢だ」と述べています。これは原子力規制委員会が安全基準の骨子案の中で、「活断層の見落としを防ぐため調査する地層の範囲を必要に応じて過去40万年分まで拡大する」ということを意識しての発言と思われる。

週刊朝日の「週刊図書館」の中で、菅直人「東電福島原発事故 総理大臣として考えたこと」という手記が紹介されています。これは当時の最高責任者が、3月11日から18日までの動きを中心に綴った手記です。この手記を読んだ、斉藤美奈子という方のコラムを紹介したいと思います。

印象的なのは事態を彼がたびたび戦争に例えている点だ。(誰も望んだわけではないが、もはや戦争だった。原子炉との戦いだ。放射能との戦いなのだ。日本は放射能という見えない敵に占領されようとしていた)。そして彼は苦悩する。戦後日本は「国のために死ぬ」ことを否定してきたが、この状況で撤退はない。決死の作業を自分は命令できるのか。

事故への備えが皆無の中で、それでも最悪のシナリオ（とは全原発が制御不能となり、5千万人の避難が必要となる事態を指す）が避けられたのは（幸運だったとしか言いようがない）とも。だから次も大丈夫と考えるのは（元寇の時に神風が吹いて助かったから太平洋戦争も負けなを考えていた軍部の一部と同じだ。神風を信じる事はできない）。

政権末期の菅直人が浜岡原発の停止と玄海原発の再稼働中止に強くこだわり、脱原発への舵を切ろうとしたのは、この体験ゆえだったろう。まさに脱原発を標榜したゆえ、彼は首相の座から追い落とされた（のだと思う）。

菅直人は敗軍の将である。が、誰がやっても敗軍の将にならざるを得ないのが「原子炉との戦い」だ。相変わらず神風を信じている人がいっぱいこの国って何だろう思う。

菅直人を巡る評価は様々ですが、批判を浴びた「官邸の過剰な介入」がなかったら、事態はもっと悪化していたのではないのでしょうか？

再稼働を進める人達には「原子炉と戦う」覚悟があるのでしょうか？ この国の未来のためにこそ、原子炉の再稼働に反対していきたいと思えます。